

「婦人の力は實に廣大なり」 —新島襄と女性教育— (大河ドラマ「八重の桜」を視聴しつつ)

講演	坂本 清音〔さかもと・きよね〕
講師紹介	同志社女子大学名誉教授

I. 八重の夫、新島襄

(1) 「八重の桜」ブーム

今年の1月から始まった大河ドラマ「八重の桜」が佳境に入ってきました。キャンパスのなかには、旗を掲げた「八重の桜」ツアーのご一行様で賑わっています。でも、なぜか現役の学生さんはシラーとしていて、ドラマもあまり見ておられないようです。その分、地方の同志社卒業生の間では大人気で、「1回も逃さず見えています」という声もよく聞かれます。学生時代の真っ只中にいる人と、卒業してからの人とでは、母校に対する思いも、これほど変わってくるということでしょうか。

それにしても、今回のドラマの始まりは、全く「想定外」でした。(普通NHKの大河ドラマに取り上げられると、その経済効果は計りしれないので、それぞれの地方から陳情に陳情を重ねる、というのが定石のようなのですが) 八重に関しては、地元の福島県はもとより、もちろん同志社関係者の全く関知しないところで、突然に『朝日新聞』のスクープがあり、それに続いて、慌てたNHKの公式発表があって、八重が主人公の大河ドラマが始まるそうだと、大騒ぎになったのです。

もちろん、今回のドラマの目的は、会津出身の山本→新島八重という女性の生き方、何ものにもへこたれない、決して諦めない、強い自立した女性の生き方を描くことによって、未だ回復されていない被災地の人々を元気づけようというのが、最大の意図なのですから、主人公は当然八重です。ということは、これからは「新島襄は八重の夫」ということで知られるようになるのですよ、という前評判が囁かれるようになり、「いや、そんなの信じられません」というのが、新島襄中心で夫妻を見ていた同志社関係者だったと思います。「新島襄があつての八重ですよ」というのが、大方の当然の思いだったのではないのでしょうか。

しかし今や、確かに新島襄が登場するのは八重の夫としての役柄であり、それ以上でも以下でもありません。しかも、襄役のオダギリジョーがなんとも気弱で、威勢のいい綾瀬はるか演じる八重の一挙一動にびくびく・おどおどしている(でも限りなく優しく、それでいて頼もしい) 姿で描かれています。これまでも人力車に乗るときは「八重さんどうぞ」と手を取って先に乗せたとか、新島襄は「八重さん」とさん付けで呼び、八重は「襄」と呼び捨てにしたなどは言い伝えられて、知識としては知っていたのですが、実際に綾瀬はるかの口を通して「襄」「襄」という呼び方が耳に入り、ドラマ上の夫婦像を目の前で演じられると、なかなかリアルで、また違ったものを見ているような気がします。

(2) ドラマのウソ、そして真実

しかしここまできて、ドラマのウソ、作りごとの部分が気になり始めました。本来、ドラマとは作りごとなのだから、そもそも八重はドラマの主人公なのだから、と分かってはいるものの、同志社女学校史として、歴史上の事実を勉強している者には、あまりにも八重のいいとこ取りに、ちょっとやり過ぎでないかと文句を言いたくなります。特に、女学校の歴史について宣教師文書という第一次資料を基に研究を重ねている者には、八重は正義の代表で、宣教師は完全なる悪者になっていかまいそう、と思ってしまう。そういうときは、京都編の時代考証をしておられる本井康博先生が、「ドラマはホントが半分、ウソが半分です。ウソの半分が入るのは、ドラマを面白くするためです」と言われ、「僕はウソの部分については責任をもちません」と言われていたことを思い出して、そうだ、八重さんのウソを楽しまなくては、という境地にもなるのですが・・・。

たまたまウソが面白いというか、逆に作りごとのなかに描かれる真実に関連して、先週、大山巖が捨松との結婚の申し込みのために、山川家を訪問という場面がありました。この場面は明らかに作りごと、フィクションです。ご存じのとおり、大山家が薩摩藩、山川家は会津藩家老の家柄ですから、「そんな、結婚なんてありえない」と山川兄弟と大山が対峙し、たがいに痛罵し合っている最中に、新島夫妻が登場します。そして、八重の提案で大山と八重が腕相撲をして勝った方が決めるということになり、新島襄の「レディ・ゴー」を合図に、二人の闘いが始まるわけです。しばらくして、大山巖が負けそうになる(これもあまり信じられませんが)、と、捨松が「大山様」と思わず声をあげて応援するところから、彼女の心中の思いが明かされます。その折、ジャッジをしていた新島襄が、大山巖と八重の手をとって「相撲という争いをしていて同じ手が、別の用い方をすれば、こんな風になるのです」と、今度は握手をさせるんです。これは、ドラマの書き手の作りごとではありますが、見事に新島襄の平和主義が明らかにされ、「お見事」と素直に思い、虚構を通して描かれる真実を実感しました。

確かに新島襄は夫として、八重の強気ぶりにタジタジになっている、弱気な、どうしようとも困り果てた表情をするオダギリジョーなのですが、そのような新島襄を描き出すことで、これまで学校とのかかわり、生徒とのかかわりでしか示されていなかった夫婦間での新島襄の姿が如実に描かれ、それはそれで本当の意味ですばらしい夫、クリスチャンである夫が描きだされるわけです。このような場面を見ながら、もう、ここが違う、あそこが違うかと思うのはやめようという気になり、最近は楽しみながら見えています。

それと、この「八重さん」のおかげで、これまで埋もれていた歴史上の人物、特に後半部で京都に移ってからは、山本覚馬と彼をめぐる人びと、また新島襄の信仰に基づく家庭生活、初期の同志社の歴史等が明らかにされたことは、いくら評価してもし過ぎることはありません。

II. 新島は変わった

少し前置きが長くなりました。ここから新島を中心に話します。

新島の女性観および新島のかかわった女性教育を考える場合、「新島自身が変わった」ということがとても大事なキーワードになると考えています。私事で恐縮ですが、今から30年前、アメリカのスミスカレッジで在外研究をする機会が与えられました。それまで私の考えのなかには、日本文化の影響なのか、家庭生活でのしつけであったのか、「石の上にも三年」という諺に代表されるように、人は容易に変わらないことが大切で、一つのことを変わらず追及して初めてその人のキャリアが築かれ、人から信用されるようになると固く信じていました。しかし、スミスカレッジでの学びのなかで(それはアメリカ人のものの考え方・生き方でもあったのでしょうか)「変わる」ことの大切さに気づき、人生を生きる上で自分を変える意味について、初めて考えるようになりました。

そういう目で新島襄の女性観をみると、先ず脱国前の儒教的な女性観からアメリカでキリスト教に出会って彼の女性観が完全に変遷したこと、さらに経験を重ね見聞を広めることで、積極的に女性の地位向上のために働いた新島の生き方が浮かび上がってきます。そして最終的に到達した女性観は、今から100年以上前に述べたものであるにもかかわらず、今でも最先端というほど新しいのです。というわけで、今日は、新島襄の女性観について、また、それに基づく女性教育観と実践について話させていただきます。

(1) 新島襄の女性観の変遷

① 脱国前—儒教的な女性観

脱国前の新島襄の生き方、女性観は、当然のことながら当時の日本の社会に一般的であった男尊女卑の考え方に大きく影響されていました。ひと言で言えば、それは儒教的な女性観、「三従の教え」に基づいたものでした。

『新島八重子回想録』(同志社大学出版部 2012年)から一つエピソードをご紹介します。『新島八重子回想録』というのは、今から85年前に、同志社大学新聞部の記者だった永澤嘉巳男という人が、84歳だった八重のもとを10回ぐらい訪問して聞いた話を『同志社新聞』に掲載し、さらに45年を経て、同氏によって1冊の書物にまとめられたものです。八重の口述筆記の形を取っていますので、読み手にとって親しみのわくものになっています。それを今回、八重が大河ドラマに取り上げられるということで、昨年、同志社社史資料センターが復刻版を発行されました。

その書のなかの一つのエピソードに、七五三少年が姉に向かって「女でものは黙っているものだ」と言った、という記述があります。状況を簡単にご紹介します。13歳のころ、彼は剣術の稽古に通っていたのですが、その日に行われる寒稽古の三本勝負で、ぜひとも勝ちたいと願いました。そして、「勝つことができればお百度参りをしますから」と水天宮様に願をかけて試合に出て、運よく願いが叶いました。しかし、お百度参りをするためには、コヨリを100本作って1回まわるとに1本置いて回数を確認しつつお参りをしなければなりません。七五三少年は、願をかけたばかりに100回まわらないといけなくなった自分に腹を立て、しぶしぶと2階の居間でコヨリを作っていた折に、あまりにも静かなので、お姉さんが心配をして「何をしているの」と聞いたわけなんです。すると、「女でものは黙っているものだ」という声が返ってきました。試合の後で身体はくたれているし、自分に対しても、声を掛けられたことに対して、腹の立った少年は、「うるさい。ぐちゃぐちゃ言うな」という気分だったのでしょうか(ちなみに、新島は癪癪持ちでした)。

脱国前の新島襄は儒教的な日本の女性観に浸っていましたので、女性が男性のしていることを質問すること自体が気に障ったのでしょうか。お姉さんに向かって、そのようなことを言った少年七五三が、今テレビのなかでしきりに八重から「あれをしなさい、これをしなさい」と言われているのを見ると、隔世の感がします。

② 帰国後—キリスト教女性観

ご存じのとおり、新島襄はキリスト教の勉強もしたくてアメリカに渡ったのですが、幸運なことに、そこでハーディさん一家に出会い、ハーディさんを介して出会うことになった、すばらしいクリスチャン・ファミリーの人たちと直接的にかかわりをもつことになりました。キリスト教的な価値観、それは「女は男に従って生きるのが幸せ」とは真逆の、「神の前では男子も女子も対等、新島も自分の足で立つ」という考えであり、その考え方に基いて行動している人を目の当たりにして、ぜひ自分もそのような生き方をしたいと確信して帰国しました。

(2) 伴侶の条件

そのことは、帰国後の新島襄の妻選びの言葉にははっきりと表れています。お嫁さんにはどのような婦人を迎えるのか、という槇村京都府知事の問いに対する答の「亭主が東を向けと命ずれば三年でも東を向いている東洋風の婦人はご免です」（『新島八重子回想録』74—75頁）や、1875年3月7日付、父・民治宛書簡「小子ハ決し而顔面の好美を不好、唯心の好き者ニシ而学問のある者を望み申候、日本の婦人の如きなき（ママ）女子と生涯共ニする事ハ一切好ましく不存候」（『新島襄全集』3 130頁）からも、十分に感じとることができます。帰国後の新島は、妻を娶（めと）るなら、儒教的な価値観のもとで、夫の命ずるままに従って生きる女性ではなく、自分の考えをしっかりと持ち自分の足で立てて生きようとする女性がいい、とはっきりと述べているのです。そういう意味で、八重は最適の女性でした。

（3）女性を一人前扱いすることの大切さ

① 岸和田伝道

次に、1878年、帰国して3年後、岸和田のお殿様・岡部長職（ながもと）の要請を受けて、新島が岸和田伝道に行ったときの報告記事を紹介します。岡部という人は、明治の初め、留学のためにアメリカに渡るのですが、ニューイングランド地方でキリスト教に出会い、これはすばらしい、新しい日本をつくるためにはキリスト教に依らなければならないと確信し、すぐに帰国してキリスト教を伝えようと思い始めるわけです。しかし、現地の友人たちに、せっかく来たのだから、もう少ししっかり勉強してから帰国したらどうか、ちょうど日本には新島襄という人が10年の留学を終えて帰国し、京都でキリスト教の学校を設立し、キリスト教の伝道のために働いている、と教えられます。岡部は早速、新島に手紙を書いて、家臣たちへの伝道を依頼するのです。もちろん新島自身でなく、学生のなかで郷里岸和田に伝道に行ってくれる方を探してくれないか、との依頼だったのですが、あいにく、その時期には生徒たちはすでに各地に伝道に出掛けていていなかったで、「私が行きましょう」と新島自身が岸和田に行くことになりました。

それはちょうど8月半ばのことだったのですが、岡部から家臣たちには連絡がついており、岸和田入りした新島が開く伝道集会には次々と人が集まって来ます。一日目も二日目も三日目も四日目もたくさんの人が集まって来るのですが、すべて男性で、女性は一人も来ません。それを見て新島は、日本の社会では、女性は社会の一員と認められていないことに気づき、「自分は男性だけではなく、女の人にも福音を説きたいのです」と要望します。そして、「我が国のように女性が奴隷のようにさげすまれている間は、社会状態は決して良くなりません。逆に、もし女性がクリスチャンとなり、教育を受け、高められていくと、彼女たちは男性以上の働きをするのです」と説明します。その結果、最後の二晩、初めて女性のための特別集会が開かれ、各回とも100人を超える聴衆が集まりましたと、岡部長職に手紙で知らせています。

② 熊本伝道

それから2年経った1880年に、新島は2カ月かけて山陽・四国・九州へと伝道旅行に出掛けるのですが、最終地熊本では、旅行中に案を練って完成した「人種改良論」を発表します。そのなかで、教育の分野を取り上げて、「教育中最モ人種退歩二関セル大事件ハ婦女子教育ヲ加ヘサル事也」（『新島襄全集』1 358頁）と言いきります。そして、これまでの日本において、男子は天・女性は地といった、男子よりも低きものとみなし、奴隷視して、女性には相応しい教育を与えず、大切な教養を学ばせない。ただ上から押さえつけて、女性の才能を発達させないで、卑しめている。このようにしていると、今に人種は退却してしまう、と儒教的な女性観の特質をやり玉に挙げて非難しました。

最初は自分の妻として女性を考えた場合、どんな女性がいいかとの個人的レベルでの女性観だったのが、あちこちに伝道旅行に行くなかで、日本女性が社会のなかでいかに差別され、一人前扱いをされていないかに気づいて心を痛め、折あるごとに、演説のなかで、説教のなかで、その非を指摘し続けたのです。

（4）新島襄と女性教育

同志社の女子教育は、1875年同志社英学校設立の翌年に、J・D・デイヴィス宣教師の要請で来日していた女性宣教師A・J・スタークウェザーが中心となって、先ずは女子塾として始まります。そして翌年、今度は新島襄が校長となって、彼女を教員として雇って同志社女学校を発足させます。だから同志社は、「私学の雄」と称された早稲田・慶応・同志社のなかで、創立当初より女子教育の部門を併設した唯一の大学と、自負できる女子教育の実績をもつ学園なのです。

実際には、新島襄は英学校の設立・存続と、アメリカン・ボード宣教師として日本全国に伝道し教会を建てるという大事業のために、女学校における教育の現場は女性宣教師に委ねざるを得ない、つまり、礼拝時間に奨励の奉仕をするぐらいしか、時間が割けないのが実情でした。しかし、創立者・新島襄の理念のなかに、女性に対するキリスト教教育は必須との信念があり、学内においても伝道先でも、その考えをアピールし続けた新島の存在は、計りしれないほど大きなものがありました。

Ⅲ. 同志社女学校における女子教育

（1）内陸部京都の条件

次に、話を明治初期のキリスト教に対する日本の状況に戻して考えます。徳川時代250年をとおして、日本全国にキリシタンご法度の考えは行き渡っており、キリスト教に近づこうという人は稀有なことでありました。安政6（1859）年から、諸外国の強い要請により、幕府は仕方なく幾つかの港を外国船の寄港地としてオープンはしましたが、キリスト教禁令の高札が取り除かれるのは明治6（1873）年のことでした。

したがって、開港地の一つであった神戸と、当時内陸部と区分されていた京都とでは、ずいぶん事情が異なっていました。すなわち、京都で外国人が住むことができるのは、日本人に雇われて初めて可能となるのであり、神戸を根拠地として自由に活動していたアメリカン・ボードの宣教師たちも、同志社で働くためには、日本人である新島襄に雇われねばなりませんでした。当時の同志社は、アメリカ人宣教師はもちろんのこと、準宣教師の身分であった新島襄の給料もすべて、アメリカン・ボードから出していたにせよ、これは女学校の場合も同じで、前述したとおり、京都に配属された女性宣教師第一号のスタークウェザーも、私塾のころはともかく、府の認める女学校で教えるには、新島に雇われねばなりませんでした。校長は、新島襄でなくてはならなかったのです。

（2）キリスト教女子教育の担い手は

ここで考えておかねばならないのは、当時誰がキリスト教女子教育を担うことができたのだろうか、の問題です。実際には、はるばる海を渡って来日してくる女性宣教師以外にはなかったという事実です。新島の場合も、アメリカで受けた教育はすべて男子校での体験であり、女学校に関しての知識は、岩倉使節団の学校視察に付き添って、マウント・ホリオーク・セミナリーを訪ねたことぐらいです。また、新島が「アメリカの母」と慕った女性たちが一体どのような学校教育を受けたかについては、新島の関心は及ばなかったのではないのでしょうか。だから、新島の滞米中にキリスト教女子教育の実際に触れることは皆無だったと言えます。ましてや、キリシタンご法度の250年を過ごしていた日本人のなかに、キリスト教の女子教育を実践することのできる人は誰もいなかったでしょう。

八重が京都で一番早く受洗したクリスチャン女性であったとしても、キリスト教女子教育の実地の教育者になるのには無理があるだろうことは容易に想像できます。しかし、ドラマのなかで描かれるように、八重は舎監として住み込んでいた母・佐久と一緒にあって、スタークウェザーたちが実践しようとするキリスト教女子教育に口を挟み、邪魔立てをします。八重の場合、同志社女学校とかかわる前に、京都府の女紅場で舎監として働いていた3年余の実績があったこと、自分は校長夫人であるとの自負があったことなどから引くに引けなかったのですが、同志社女学校のなかではマイナス要因でしかなかったのです。その結果、女学校内での女性宣教師対日本人教師との軋轢は時間と共に大きくなりました。

（3）女学校校長としての新島襄の役割

新島襄には、校長として、女学校の正式のスタートのときのみならず、女学校の存続・発展の重要なモメントに果たした、主要な役割がいくつかありました。ここでは、次の二局面だけを取り上げて説明します。一つめは女性宣教師雇入れのために寺島宗則外務卿に行なった直訴と、二つめは女性宣教師が「校長」職に就くことに対する支持表明でありました。彼はそのために生命を使って奔走し、またドンドン自己改革をしていきました。

まず、一つめは女性宣教師雇入れに関してです。新島が特に苦勞したのは、正式に女学校を開校した1年後のことでした。創立に際しての新島の届け出で、スタークウェザーを初代同志社女学校教師として雇うことに対しては、難なく許可した槇村正直京都府知事でしたが、その後、仏教徒たちの同志社に対する猛反対が始まると、二人目、三人目の女性宣教師には在任許可を出さない、という嫌がらせを始めます。そうすると、せっかく京都の女学校で教えるために次の年に来日したH・F・パーミリーとJ・ウィルソン宣教師は大変不都合で落ち着かない生活を強いられます。すなわち、彼女たちは旅行願いを援用して、数週間京都に来て教えては、神戸に戻るという生活をせざるを得ませんでした。とうとう新島は知事を相手に交渉しても増が明かないと判断し、思い切った何の面識もない寺島宗則外務卿に手紙を書く決意をします。1878年2月28日付のものです。

以下が、現代文に訳されている書簡です。（『現代語で読む新島襄』丸善 2000年 134—137頁）
「京都、同志社社員（理事）新島襄から謹んで外務卿寺島公閣下に申しあげます。私は民間の一学徒にすぎませんので、いまだかつて閣下にお目にかかったことがございません。唐突に書簡を差しあげ、閣下のご尊顔を損なう非礼をお許しください。伏してお願ひしたいのですが、閣下の海のように広い度量に免じて私の非常識を受け入れ、どうかご一読ください」という書き出しの、大変へりくだった書簡です。

このころ、すでにスタートしていた同志社英学校を引き合いに出して、「男子の就学のこのような敏速さを見て、社会の改良と前進が期待できるのを楽しみにし、さらに目を転じて女性の社会を見れば、ひそかに心嘆かわしく思わずにはいられません。こうして女子にもまた教育が必要であるとの説を主張して、昨年四月からはさらに女学校を設立し、アメリカ人女性を招いて教育を任せました。最近になりさらに規模の拡大を計画し、新校舎の建設を行っており、あと数カ月で完成します。そのためにさらにアメリカから女性教師二名を呼ぼうと考え、本年一月九日付で京都府庁に願書を出し、外務省あてに女性教師二名の滞在許可証を申請いたしました。」そのようにして許可を待っているのに未だに返事がなく困惑しているので、ぜひとも閣下のご配慮のもとに許可を出してほしいと、新島は平身低頭して懇願しました。滞米時、岩倉使節団への協力を依頼されたときに、田中不二麿文部局長官に対して「座礼をする」留学生とは別に、自分は「部屋の間で胸を張って立つたままです」といって、かつては誇らしきハーフ夫妻に報告した新島襄の、この時点での心中を推し量ると、胸が痛みます。

二つめは、2度目の渡米後の新島の意識変革（女性校長の支持表明）です。これには少し説明が必要です。先の項目「キリスト教女子教育の担い手は」でも説明したように、明治初期の日本でキリスト教の女子教育を実施することができるのは、本国でキリスト教教育を受け、かつ教師として実践してきたアメリカ人女性宣教師しかいませんでした。そのやり方が日本の風土にあったか否か、また来日した個々の宣教師のキャリアや考え方によって個人差はあったとしても、ともかく、それに頼る以外なかったのです。

にもかかわらず京都では、日本人が校長でない女学校は存立しないということで、校長夫人としての八重の関与意識も強かったのです。女性宣教師と新島八重・佐久母娘の

諍（いさか）はいまますます激しくなり、アメリカン・ボードのなかでは、「同志社女学校の難しさは、もう、ことわざ固然」との評判が立っていました。新島自身も校長として困り果てていたのかもしれませんが、しかし、そのような渦中であって、２度目の渡米以前の新島は「校長は自分だ」という考えにどちらかといえば固執し、経営面ではウーマンズ・ボードに頼らざるを得ないとしても、教育面での責任者の地位を女性宣教師に委ねることには消極的でした。物事を最も客観的にみることができると評価されているD・W・ラーネッド宣教師の報告のなかでも、女学校問題の要因として挙げている項目の一つに「新島でさえ、女性が校長になるという考えになじめない」ことを挙げています。やがて、その確執が修復不可能なものとなり、アメリカン・ボードは1885年の年会で、同志社女学校から女性宣教師の総引き揚げを決議します（女学校明治一八年事件）。

それはちょうど新島が第2回の訪米中の出来事だったのですが、奇しくも、この時期が彼の自己改革の契機ともなりました。ボストン滞在中に、新島は積極的にマウント・ホリオーク・カレッジやウエルズリー・カレッジを訪問して、同志社女学校の教師となる女性宣教師をリクルートしましたし、それらの女子大学の女性学長との面談を通して、責任ある地位の女性の姿に接しつつ、女性が学校長として働くことを十分に納得していききました。

それゆえ、新島襄の帰国前から、同志社女学校で教えていた池袋清風が、女学校では女性宣教師が権限をもち過ぎている、英学校と同じく教員は皆同権にしてほしいと進言したのに対し、「新島校長は宣教師クラクソンがその権利を持つことに賛同しているだけでなく、公認した」と、友人・下村孝太郎宛書簡のなかで不満を述べています。これぐらいはっきりと、第2回訪米後の新島襄は、「アメリカの母」にはなかった「学校の経営者・責任者」となっており、女性宣教師の存在を認め、かつ応援し始めたのです。そうすると、女学校問題は次第に終息していききました。

IV. 「世の改良者」となる女性教育

そればかりでなく、第2回訪米後の新島は、社会をリードする女性の生き方を公の場で大いに推奨するようになります。

（１）「女子教育ハ社会ノ母ノ母ナリト」

以下は、「女子教育ハ社会ノ母ノ母ナリト」という文言を使って、梅花女学校で新島が講演した内容の一部です。草稿として残っています。「予ハ此校ノ女生徒二向ヒ一言ナキ能ハス、（中略）善良ナル有益ナル婦女子ノ輩出シテ、社会ノ塩トナリ光トナラレン事ナリ」（『新島襄全集』1 421—422頁）との願いをはっきりと表明しました。この講演の前半では、世間では、キリスト教女学校は教育という名のもとに伝道をしていると非難されがちであるが、「基督教二八広〔ク〕人ヲ愛シ隣ヲ愛〔セ〕ヨト云教カアレハ、随テ信徒中ニ社会ノ改良ヲ計ルノ精神ヲ発達セシム、此ノ精神発達スルヤ社会改良ノ基ニ着手セサルベカラス」（同419頁）と述べ、堂々と、キリスト教の教えが女性に社会改良のために働く意欲をもたせることを指摘し、男子と伍して働くキリスト教女性の出進を新島襄は奨励しているのです。

（２）「新島襄先生の遺訓」

最後に、新島の女性観の集大成ともいえる雑誌記事を紹介します。それは、日本キリスト教婦人矯風会の書記であった佐々城豊壽（とよじゅ）が1890年2月号の『女学雑誌』に掲載したのですが、題は「新島襄先生の遺訓（えくん）」です。新島没1カ月後の記事ですが、そのなかから今日のタイトル「婦人の力は實に廣大なり」を引用しています。

記事によりますと、同志社大学設立運動のために骨身を削っておられる先生のお役に立ちたいと、矯風会の有志が音楽会を開いて募金をし、それを先生の許に届けた。それに対してすぐにお礼状を頂いているにもかかわらず、先生は上京の折にわざわざ佐々城豊壽と面会をしてお礼を述べられ、キリスト教を掲げて社会改良のために戦っている女性の同志にエールを送ってくださった。思いがけず、その日から1カ月後に先生が召天されたので、そのときに「先生の口よりして直接に給ふ所の訓戒を記して以て紀念となす」（『女学雑誌』198号 万春堂 24頁）との意図で、まとめられた文章です。まさに新島が抱いていた、女性の社会進出に対する人生最後の思い、願いが如実に表れていると思いますので、掻い摘みではありますが、数カ所を選んで紹介させていただきます。

「貴姉（余に向て）に頼みたき事業あり、そは外の事ならず女権を擴張する事にもふ一層の力を盡されたし（中略）故に先づ女学校生徒に人権を重んずべき事と慷慨心を起さしむるの一事是なり」

どうか学校で教えるときには人権がどれほど大切かを教えて、やる気を起こさせてほしい。自分はだめだ、何もできないと思うと、誰も前には進めない。神の前では一人ひとりの人間が等しく大切であり、男女の差はない。それぞれの人に、その人にしかないタラントが与えられていると確信できたら、臆することなく社会に出て働くことができる。その際、女性の力は「實に廣大で」、特に社会改良の面では、男性をも凌ぐ力を発揮できるのだと、新島は女性にエールを送っています。

「御互に私の爲めにあらず皆神の下僕たるの義務を遂るに過ぎざれば決して人の誇りにより攪むることなく変ずることなき様にせられよ」キリスト教の信念をもって世のなかを変える運動をしている矯風会の人たちも、私（新島襄）も「自分のためではなく、神様の僕（しもべ）としての仕事を担ってやっているのですから、世の毀誉褒貶（きよほうへん）をものともせず頑張りましょう」と、大学募金運動は命を縮める仕事と知りながらの挑戦であることを実感しつつ、最期の日を目前にした、新島の決意がうかがえる文章です。

「御身達決して失望することなく倦むことなく憚ることなく断然世の革命者と成られよ。否世の改良者と成りて働られし」と。今から100年以上前、女性に向かって世の革命者となるように、否、世の改良者となって働いてほしいと言われた新島襄のメッセージは、今も斬新で、私たちの心を鼓舞します。

V. 新島襄の復権を

新島襄はキリスト教に出会って、それを信じることによって彼の人生を180度転換させました。そのなかで全世界の半数を占める女性に対する見方、考え方も180度転換しました。そして、生涯にわたってキリスト教に基づく女性教育の重要性を主張し実践しました。現在の社会風潮のなかで、最近は元気のよい女性も多く、女子会とかで盛り上がっていますが、校祖・新島襄が考えたような成熟した女性に私たちはなっているでしょうか。新島が主張したような、芯のある、愛のある女性として、毎日を送っているでしょうか。新島はキリスト教に出会うことによって、神の前では、男女の値打ちに差はないと確信し、男性の教育のためだけでなく女性教育のために、身も心も捧げました。新島は、自分の学校である同志社内だけに留まらず、世の中に出ていって、自らの信ずる男女平等の思想を力説しました。一人ひとりに神から与えられている、自分らしく生きる権利・人権・女権を大切にすることを、そして自分の進むべき道を堂々と歩んでいくことの大切さを主張しました。新島を支えていたのは、キリスト教の信仰です。同志社教育の根底にあるのはキリスト教の思想です。同志社は、もっとキリスト教の価値観を学生にも教えることを重視しないといけないのではないのでしょうか。そうしないと、新島の真の思いは決して伝わらないでしょう。

「八重の桜」放映の数年前に、NHKの「歴史秘話ヒストリア」で八重が取り上げられて以来、八重は「ハンサム・ウーマン」の代表として全国的に注目され始めました。すなわち、「顔がきれいというわけではありませんが、行いがすばらしい。心根がすばらしい女性」です。それまでは徳富蘇峰が名付けたという「鶴のような女」が有名だったのですが、大層な変わり様です。ドラマのなかでは、八重はその言葉を逆手に取って熊本バンドの生徒たちに盛んに反撃していました。

この言葉の出典は、もうあちこちで引用されていますが、新島襄がアメリカの母と慕ったハーディ夫人宛に自分が結婚する人はどんな人かを知らせた文章です。
“Of course she is not handsome at all. But what I know of her is that she is a person who does handsome.” (Neesima to Susan H. Hardy 1875.11.23『新島襄全集』6 169頁)

八重が「鶴」ではなく「ハンサム・ウーマン」として知られるようになったことは、その出典となった新島襄の言葉どおりに、すばらしいことです。しかし、それを言ったのは新島襄だったということを忘れないでいただきたいのです。新島襄がその言葉を使わなかったら、八重がハンサム・ウーマンであるとか、ハンサムな行いをする人と表現することを誰も思いつかなかったでしょうから。

「八重の桜」では、八重の夫・襄という関係で描かれていますが、私は、やはり新島が先、新島襄があつて八重があるのが妥当だと思います。だからといって、もちろん新島の後を八重が従って歩くことを意味するものではありません。そんな女性は、新島が一番望んでいなかったでしょう。

さいごに

ドラマで始めましたので、最後も、ドラマのエピソードで終わります。前に引用したのと同じ「鹿鳴館の華」という題の回です。その回は題名どおり、山川捨松をめぐるドラマでした。始めにお話したように、大山が山川家に結婚の申し込みをして、大山と八重が腕相撲をして決めるという、現実にはおよそあり得ない場面設定の少し前ですが、捨松が八重にどうして新島と結婚する気になったかを尋ねます。それに対して、「ジョーが言ってくれたがら。私に、共に歩んで行こうと」。そして八重も、「同じ時を生きてみでえと思った」からと答えます。カッコいいですね。夫婦が互いの人格を認め肩を並べて生きて行く様子が、このフィクションのなかで見事に表現されていました。

ドラマ「八重の桜」のおかげで、「八重の夫」としての「襄」の生き様を通して、新島襄の人間味がクローズ・アップされました。今となっては、これはこれで良かったと納得しています。

*追記

講演会では、当時NHK大河ドラマで放映中の「八重の桜」の話題を挟み込みながら、主に新島襄の女性観の変遷、および女性教育とのかかわりを述べた。

また同時に、新島襄が英学校で、また家庭生活を通して、女性を一人前の人格として扱ったこと、社会のなかで女性を教育する重要性を語ったことにより、男子生徒にも大きな影響を与えたことにも触れたので、その側面を以下に箇条書き的に書き加えておきたい。

- ①熊本洋学校では廊下で授業に参加する以外なかった女生徒たちが、同志社英学校のクラスでは机を並べて学ぶことが容認されたこと（横井宮・徳富初・山本峰が、女学校では学べない科目を、英学校のクラスで男子生徒と同じ扱いで授業を受けていたことが、1877年秋学期～1879年春学期の出席簿から分かる）。このようなこともあって、新島襄が「八重さん」と呼んで、夫人の人格を重んじ、対等の夫婦生活を営もうとしたことに反発をしていた初期の生徒たちも、自分たちの夫婦生活のなかでは、新島流を見習ったこと（たとえば、海老名弾正は夫人に「お宮さん」と呼び掛け、「あなた」という尊称を用いた）など。
- ②新島襄の在世中に同志社に在学した出身者で、女子教育に携わる男性が多く出たこと。宮川経輝（同志社女学校、梅花女学校）、加藤勇次郎（同志社女学校）、松浦政泰（同志社女学校、日本女子大学校）、麻生正蔵（梅花女学校、日本女子大学校）、吉田作弥（神戸女学院）、原田助（神戸女学院）など—宮澤正典は『同志社女学校史の研究』（思文閣出版

2011年 17頁)のなかで、上記卒業生ら27名の名前を挙げている。

③同志社大学が大学令で大学になったのは1920年であるが、その3年後の1923年に、海老名弾正総長は、本望であった同志社大学に女子学生の入学を認めたこと(国立大学では、同志社に先んじて、東北帝国大学1913年、北海道帝国大学1918年があるが、同志社大学は日本の全大学のなかでも3番目、私学としては最初であった)。

2013年10月29日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川校地「講演」記録